

単元「生と死をみつめて」について

—夏目漱石『こころ』をどう扱うか—

山本 伸子

I はじめに

本校の生徒は、国語の学力の中では、読解力や問題解決能力が高く、家庭学習では古典の予習がよく行われている。反面、授業中自分の意見を発表したり、生徒同士が話し合ったりするときに十分実力を発揮できない生徒が見受けられる。また、読解力のわりに表現力が劣る生徒が多く、作文や討論を好まない傾向もある。そこで、夏目漱石『こころ』を軸に、単元「生と死をみつめて」を設定し、高校生には少し重いテーマではあるが、思索を深め、自分なりの考えをまとめ、さらに教室という場で意見を交換することはできないかと考えた。教材には、さまざまな「生」と「死」の様相を内包するものを選び、それを読むことによつて「生と死をみつめ」、さらに「生きる力」に結び付いていくような方向に学習を深めていきたいと考えた。

今まで私は、『こころ』の学習指導では初発の感想を書かせ、登場人物の心理を中心とした読解の授業をし、最後に感想文を書かせるというパターン化した指導をしてきた

という反省もあつて、今回は私自身の学習指導のありかたを見直したいという気持ちもあつた。また、教科書では、「上」の「先生と私」の1〜5、「下」の「先生と遺書」の2と41〜55（間に省略部分あり）しか扱われていない『こころ』をなんとか生徒に全文を読ませて、作品を丸ごと読む楽しさを共に味わいたいという願いもあつた。

II 単元とそのねらい

1 自主単元「生と死をみつめて」

2 対象 2年10組（男子18名、女子24名、計42名の文系のクラスで、「現代文」は週3単位）

3 単元のねらい

ア 「生」と「死」をテーマにした作品を読むことによつて、生徒に思索を深めさせる。

イ さまざまなジャンルの文章を読む楽しさを味わわせるとともに、表現に即して内容を読み取る力を身につけさせる。

ウ 感想文や意見文を書いたり、シンポジウムに参加したりする、「理解」と「表現」を関連させた学習活動によって、表現力の深化をはからせる。

4 教材と配当時間

- ア 「死にゆくものの孤独」 ノルベルト・エリアス
2時間
- イ 「ころ」 夏目漱石 20時間
- ウ 「会議進行」 堀越恒爾 1時間
- エ 「仰臥漫録」 正岡子規 2時間
- オ 「瓦礫の町から―阪神大震災の歌」 1時間
- カ 「萩の花」 宮本常一 1時間
- キ 単元全体の感想文 1時間

III 単元全体の指導の流れ

ア 「死にゆくものの孤独」

第1時 ①段落分けをしながらの黙読。

第1〜3の段落と第4段落との役割の違いについて考える。②「文明の進化に対する人間の問題の變化」についての考察。

第2時

第1〜3の段落と第4段落の関係を図示しながらの全体のまとめ。「死」に対する人々の態度、「死に方」の変化の考察。

イ 「ころ」(一)内は「ころ」全文との対応関係。

へ内は宿題にして読ませておいた部分。

第1〜2時 通読。初発の感想を書かせる。(第14時終了までに「ころ」全文を読んでおくよう指示。参考文献一覧も配布。)

第3時 登場人物とあらすじの確認。第1段落第1節の理解。(上1)

第4時 第1段落第2節の理解。(上2・3) へ上3

・「先生」と知り合ったきっかけの理解。

・「私」の人物像に繋がる描写を探しての人物像の把握。

第5時 第1段落第3節の理解。(上4・5)

・あらすじのまとめ。

・「先生」が「どうして」と言ったときの気持ちの把握。

・「先生」の「あなたはまだ死というものを真面目に考えたことがありませんね。」という言葉の意味の把握。

・「私」の態度の理解。

第6時 第2段落第1節の理解。(下2) へ上4〜下1

・第1段落第3節〜第2段落第1節間での省略部分のあらすじの発表。

・「先生」が遺書を書いた理由の把握。

・「先生」の「私」に寄せる気持ちの理解。

第7〜9時 第2段落第2節の理解。

(下41、43) 〈下21、24、下42〉

・「K」の人物像の把握。

・恋を打ち明けた「K」の様子と「私」(ここから

「私」＝「先生」)の態度の理解。

・「上野から帰った晩」の「私」の心情と「K」の行動の意味の理解。

第10時 第2段落第3節の理解。(下44、45) 〈下13、

15〉

・「覚悟」に対する「私」の解釈と「私」の行動の理解。

・「結婚の承諾」が簡単に得られた理由の把握。

・「K」が来る以前の「奥さん」、「お嬢さん」、「私」の生活の理解。

・「結婚の承諾」が得られた「私」の心情の理解。

第11時 第2段落第4節の理解。(下46、47)

・「K」に対する「私」の心情の理解。

・「私」の性格の理解。

第12、13時 第2段落第5節の理解。

(下47、48)

・ここまでのできごとの時間的推移の把握。

・「私」と「お嬢さん」の結婚について聞かされた

「K」の態度とその理由の理解。

・「K」の態度を知った「私」の心情の理解。

・自殺した「K」を発見した「私」の心情の理解。

・「K」の遺書の内容の理解。

・遺書を読んだ後の「私」の行動と心情の理解。

第14時 第3段落の理解。(下52、53、54、55)

・一年後の「私」の生活と心情の理解。

・「恐ろしい影」、「人間の罪」についての理解。

・「私」の「妻」に対する気持ちの理解。

・「私」が自殺へ向かう心情の把握。

第15時 「私」(この「私」は「こころ」全文の中で

「先生」の遺書を読んでいる「私」)のその後について
のメモ作成。「資料 1」参照。

第16時 「私」のその後についての話し合い。(二人組)

第17、18時 「私」のその後についての意見文作成。

(千六百字以内)

第19時 意見文の評価カードによる相互批評。(二人

組)「資料 2」参照。発表者を選び、シンポジウ

ムの準備をさせる。

教材ウ「会議進行」(堀越恒爾)によってシンポジウ

ムの心構えについて考えさせる。

第20時 「私」のその後についてシンポジウムを開き、

意見交換、相互評価を行う。「資料 3」参照。

エ 「仰臥漫録」

第1時 日記を書いた経緯について。範読。「仰臥漫

録」の内容の理解。

第2時 自分の書いている日記の文章との違いの

発表。筆者が「死」を目の前にしてこの日記を書いた理由と心情の理解。

オ 「瓦礫の町から―阪神大震災の歌」

第1時 「瓦礫の町から―阪神大震災の歌」(眩)短歌会編より十首をえらびプリントしたものを読み、「朝日歌壇の選者の寸評」を参考に、好きな二、三首を選び、二百字以内で寸評を書かせる。

カ 「秋の花」

第1時 朗読を聞かせる。感想を発表させる。

キ 単元全体の感想を書かせる。(形式、字数は自由)

IV 「こころ」第15時以降の指導の実際について

1 第15時 「私」のその後についてのメモ作成。「資料

1」

「資料 1」のプリントを配布し、「考えを進める手順」について説明し、意見文の構成を考えさせたが、なかなかまとまらない生徒が多かった。そこで、あらかじめペアを組ませておいた二人組で相談しながら構成メモを作成することになった。さらに、「参考」「こころ」―「私」のその後について―その後の「私」が顔を出す部分」のプリントも、配布した。ほとんどの生徒が構成を考えるまでには至らず、自分の考えたことを簡条書きにするところまでで終わった。

2 第16時 「私」のその後についての話し合い。(二人組)

「資料 1」の「◎ 自分の考えの根拠や理由をはっきりさせよう。」という点を中心に二人組で話し合いをさせたが、ペアの相手が第15時以降変わらないうちのところもあって、自分の意見のはっきりしないところ、理由や根拠となる本文の記述を探すことについても相談をさせた。それぞれが手持ちの文庫本や全集の「こころ」を持ってきて分析しているところもあった。また、初めに配布しておいた「参考文献一覧」にある図書も教室に持ち込み貸し出した。

3 第17～18時 「私」のその後についての意見文作成。(千六百字以内)

第16時に作成した構成メモは、簡条書き程度の者が多かったので、改めて書く順序や字数の配分を確認させた。構成メモができていなかったものについてはこの時間までに教師が相談にのっておいたので、全員原稿用紙に書き始めた。途中で引用の書き方を質問されて、全体に説明した。

4 第19時 意見文の評価カードによる相互批評。(二人組)

まず、ペアの相手の書いた意見文を「推敲のポイント」のプリントに従って推敲させ、赤ペンで添削させた。その後、相互評価カードのそれぞれの項目に相手の意見文に対する評価を文章で書き入れさせ、相手に返させた。返ってきた自分の意見文に対する評価を読ませ、さらに自分で添削したいところがあれば書き込ませた。「資料

2]

第20時のシンポジウムの概要について説明し、教材ウ「会議進行」(堀越恒爾)によって「討論」や「話し合い」の際の注意点について考えさせた。

発表者については、意見文と相互評価カードを回収して、教師の方で読み、クラスから三名を選んだ。選出後、放課後を使って、それぞれの意見文をもとに発表内容をまとめさせ、発表の練習をさせた。

5 第20時 「私」のその後」についてシンポジウムを開き、意見交換、相互評価を行う。

ア へ授業の流れ

導入 本時の目標の確認

シンポジウムカードを配布し注意を与える。「資料

3」

展開 (1) 提案者の発表

提案者3名に自分の意見を発表させる。

(2) 意見の整理

各自のシンポジウムカードのメモを整理させ、提案者の意見に対する質問、自分の意見を書き込ませる。

(3) 班での話し合い

①シンポジウムカードのメモを班員同士で読み合う。

②班ごとの司会者の誘導によって、提案者の発表

全体についての意見を班員同士で述べ合う。

③ 6、7班は0さん、2、3、5班はIさん、1、4班は、S君に対する質問、意見をまとめ、発表の準備をする。

(4) 質疑応答・意見交換

①班ごとに代表者が提案者(三名共)に対して質問をする。

②提案者は質問の回答について、ブレンと相談する。(ブレンとは、第15時以降の二人組の相手)

③提案者は質問について答える。

まとめ

提案者への批評
シンポジウムカードに提案者の発表態度や内容についての寸評を書く。

(0さん、Iさん、S君の意見文は、「資料 4」、「資料 5」、「資料 6」参照。シンポジウムの聞き手の座席配置はペアの相手と向かい合わせに座って、ペア3組で一つの班を作る。)

イ へ提案者に対する主な質問(シンポジウムカードより整理)

0さんに対して

・「死は無ではなく他人を動かすほど重いもの」には同感。

・生きることに「新しい命」は関連しているのか。

・「新しい倫理」とは何か。

・「だれかのために生きる」ことが「生」のエネルギーになるのか。

・「どんな運命も受けとめ強く生きる」には何が必要か。

・「どこがどう作用するために死ぬのか。

・「先生」への尊敬の気持ちはどうなったのか。

・「父」の死は安易なものだったのか。

・死を選ぶのは弱いからではないのか。

・「生の死」とは、死んだつもりで生きていくことなのか。

Iさんに対して

・本当に「私」には多角的に物を見る力が備わったのか。また、「先生」にはその能力が備わっていなかったために死んだのか。

・「明治」という時代が理解し合う障害になるとはどういうことか。

・「先生」は「私」に自分と同じような生き方をしなくてはほしくないから遺書を書いたというのがわからない。

・「愛」はエゴを越えられるのか。

・「愛」の二つの側面とは何か。

・「先生」から「K」への憧れや尊敬は偶像へのものだったのか。

・なぜ愛も友情もあったのに「先生」の心は蘇らなかったのか。

・「私」が「多角的な視野」、「人間のうちなるところ」に目を向けるようになるだろうという指摘には賛成。

S君に対して

・「私」のその後についての意見が述べられていなかった。

・「柔軟で人間らしい心」は「先生」にもあったのではないか。

・「K」は「道」のためにすべてを犠牲にできたエゴイストとは考えにくい。

・人間にはエゴがつきもので「柔軟で人間らしい心」があっても同じなのではないか。

・「K」は結局他人にもエゴを押し付けたとはいえないか。

・「先生」は「私」との友情、「奥さん」からの愛情もあつたのに「柔軟で人間らしい心」を取り戻せなかったのはなぜか。

・「K」は自分がエゴイストだと知らなかったのか。

・自我を突き詰めると死に至るとはどういうことか。

・「先生」の死は孤独からの逃避ではないのか。

ウ
へ提案者に対する主な意見

Oさんに対して

・心というものが強い力を放つものであるというの
はまさしくその通りだと思う。その力を罪の意識
に押し潰されてしまう方向ではなく、罪を受けと
めて強く生きる方向へ向ける必要性があるので
ないか。

・私が信頼することができるものを持つことが大事
だと思っていたのと、何があるうと何かのために
生きることがたいせつというOさんの意見は似
ている所がある。

・「先生」や「K」の死を通して、また「先生」の
遺書を読んで、「私」がどんな苦難にあつてもそ
れを乗り越えて生きていくことの大切さを学んだ
という点は同感。

・「私」の「新しい倫理」は誰かのために生きるこ
とだといっていたが、もつと自分のために生きる
というのが正しいと思う。

・「私」のその後の人生は、それはこの「こころ」
を読んだ私たちの人生である。人によつてどう感
じるかは決められない。

Iさんに対して

・多角的な視野を持てた「私」が、その後どのよう
な生き方をしたかを推測できていたのは三人のう
ちIさんのみで、それがどのような意味を持つか
まで論を発展させられていた。

・「明治」という時代が「私」の理解を阻んでいる
というが、「私」が純粹で真つ白な心を持つてい
たから、「先生」と「K」の二人の人生をそつくり
受け取れたのではないか。

・「愛」を中心にまとめている。

・「心によりかかつて生きる」のは「私」。でも
「先生」や「K」も「心によりかかつて生き」て
いたのだと思う。だから苦しんだのだと思う。

・偶像から人間として「先生」を尊敬するようにな
るといふことはどういふことなのかわからない。

S君に対して

・心の柔軟性ということにハッとさせられた。共感
できた意見だった。

・非常にすつきりとまとめられており、自分の意見
を発展させてうまく言葉で言い表せていた。

・心の柔軟性がたいせつということに共感した。人
間には人間らしさが大切なのだということ、それ
を「私」はわかっているだろう。人間を偶像化せ
ず、人間としてとらえることが「私」にはできて
いたのだから。

・「先生」も「K」もエゴイストであるということ
は実にその通りである。しかしそれを「先生」が
本心に認識していたかどうかは疑問である。

・「先生」が心の柔軟性に欠けていたというのはい

いとしても人間らしさに欠けていたとは思えない。

・「先生」に柔軟な心がないなんてことはないと思う。「K」はエゴイストであることとは意味では取れるかもしれないが、「K」はあくまで自分に厳しかったのであって一口にエゴイストとまとめられるものではないと思う。

・友情や愛情を死から回復するための特効薬みたいに定義付けるのはおかしい。「先生」は友情や愛情に疑問を感じたので死に至ったのではないか。

V 反省と今後の課題

学年最後の国語の授業を通しての感想文の中では、一番印象に残った授業として「ころ」を挙げた者が多く、「みんなに一生懸命本を読んで考えたのは初めてだった」とか、「みんながどんな意見を持っているのがよくわかった」、「一つのテーマについてみんなが真面目に考えていて感動した」などという意見が書かれていた。しかし、私は「ころ」の授業によって「討論」、「話し合い」の授業の難しさを思い知らされた。自分にとっても初めての試みであり、シンポジウムがどのように展開し、生徒たちがどんな意見を出してくるのか、事前に予想できなかったこと、また、シンポジウムの組み立てがうまくできなかったことは、指導者として至らなかつたと深く反省している。

以下、具体的な点について、改善すべきことや配慮すべ

きことを述べてみたい。

(1) 単元全体の構想と配当時間について

単元全体で28時間に及ぶのは、単元の構想として大きすぎる。「ころ」単独の単元でも生徒は十分「生」と「死」についての考えを深めることができたと考えられる。ただ、他の教材を含めた単元設定にしたために、「ころ」を読み抜く下地のようなものができ、単元としての立体感が出たと思われる。

(2) 「ころ」全文を読ませたことについて

「私」のその後を考える「意見文の作成と、全員をシンポジウムに参加させるために「ころ」全文を読ませたが、内容が消化し切れず、意見文そのものの的が絞れない生徒もいた。夏休みに「ころ」全文を読んでおくように指示をしてはいたが、もう少し工夫して、手引きのようなものを用意するとよかった。

(3) 「私」のその後を考える」という意見文のテーマ設定について

第20時のシンポジウムを意識して、「ころ」全文を読まなければ書けないテーマで、しかも全員で話し合えるものということで、意見文のテーマ設定が難しかった。かえって、「ころ」の自由な読みを妨げたことになつたかもしれない。次回は、話し合いは、例えば「Kの自殺の原因は何であつたか。」

など、狭い範囲での読みから導き出せるものにし、「『こころ』全文を読んだ上では、感想の発表や「先生の生き方についてどう思うか。」などのテーマでの班ごとの読書会形式などもおもしろいのではないかと考えている。

(4) シンポジウムの授業について

- ① シンポジウムという形態自体は、授業として機能すると考えている。ただ、今回のように提案者の意見にはつきりとした相違点が認められない場合、それに対する質問や意見は出しにくい。
- ② 提案者の発表内容が難しく、一度聞いただけでは理解しにくい内容もあった。発表内容の資料か、要点のメモを配布した方がよかった。
- ③ 提案者に相談相手としてのプレーンをつけたが、必要なかった。
- ④ 質問や意見が出ないのではないかと考えて、班ごとの話し合いを組み入れたが、そのために時間がかかってしまった。提案者と聞き手という、本来のシンポジウムの基本の形で、その生徒なりの意見を言わせたほうが、シンポジウムとしてのまともには欠けるかもしれないが、クラス全員がよく理解できたのではないかと思われる。
- ⑤ 班ごとの話し合いについて、司会者にあらかじめその手順を指導しておくべきであった。

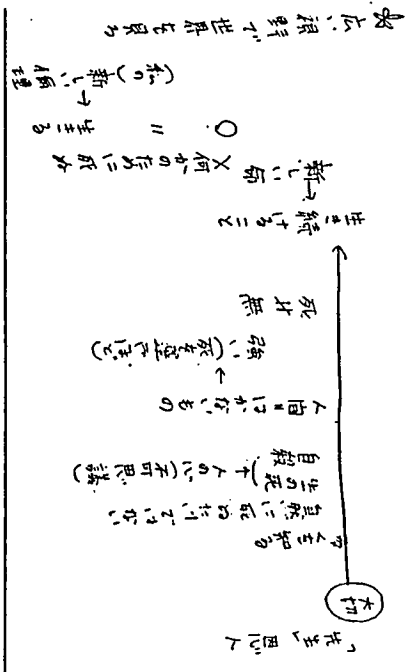
【資料3】

「こころ」シンボジュムカ | H7.11.16

発表者 () () () () ()

【発表者の意見の概要メモ】

【自分の疑問・意見メモ】



【発表に対する自分の意見をまとめると】

「和」の語源で「生」を続けることと在るは、大森岡崎先生の「和」の「生」のうちに在るに在る。

【発表者に対する寸評】

声も大きく「三三」とか「和」といふような言葉も一度ききるとよく、強調していき、よく聞かされた。

